

ラブ・アゲイン！

白く霞かすみがかかった中で、自分を呼ぶ男の人の声が聞こえる。

「かおる……かおる」

幸村ゆきむら薫は、辺りを見回して声の主を探した。だが、姿は見えない。どこまでも霨もやが続いている
る――

薫が目を開けた時、視界の端に黄金色の髪が映った。光に照らされてキラキラと輝いているそれを迎むかえると、空のように青い瞳とかち合う。

「薫？ 気が付いた？」

「……」

目の前の男性が自分に問いかけているのはわかる。けれども薫は、自分の右手を握りしめているその金髪碧眼へきがんの美男子に驚いて、何も言うことができなかつた。

(え………柁か………様………?)

彼は榊崇弘。正確な歳は知らないが、見た感じは二十代後半から三十代前半くらいだ。高い鼻梁にくっきりとした二重。金髪碧眼で彫りの深い顔立ち。その姿はまるで、物語に出てくる王子様。

榊は、薫が社員として働いているハウスキーピング会社の顧客である。薫は彼に数日前に初めて会ったばかりだ。

薫は、いかにも外国人な風貌の彼に尻込みして、「ハ、ハロー？」なんて、コテコテの日本語発音で話しかけてしまった。その時彼から、ぎこちない笑顔で「俺は日本人です」と言われたのは記憶に新しい。

そんなこともあって、榊は大変印象深い顧客だった。

彼が住んでいるのは、ファミリー世帯が多く住む海岸沿いの三十三階建て高級マンションだ。最近引越してきたらしい。だが、仕事が忙しくて掃除をする暇がないため、部屋全体の清掃と片付けをしてほしいという依頼だった。

依頼書によると、広さは驚きの5LDKS。S——つまりサービスルームまである。入ってみれば、最新式のシステムキッチンに、触るのが恐ろしくなりそうな高級家具や調度品が並んでいたのだ。

他人の家を掃除するのが仕事で、今までそれなりに緊張感を持って業務にあたっていた薫だが、ここまで緊張したことはなかった。

そして、その日の夜。掛け持ちで働いている宅配クリーニングのアルバイトで、薫が回収に向かった先が偶然にも彼の部屋だったのだ——

「薫！ ああ、よかった！ 薫……、薫……」

「きゃあっ！」

突然、覆い被さるように榊に抱きしめられ、薫は目を見開いて悲鳴を上げた。

確かに顔見知りではあるが、それは仕事を通してのこと。下の名前で呼ばれるほど親しくないし、ましてや抱きしめられることなんてあり得ない関係だ。

薫はおどおどしながらも、懸命に榊の胸を両手で押した。

「あ、あの……榊様……？」

「薫？」

榊が顔を上げ、吸い込まれそうになるその青い瞳で、じつと顔を見つめてくる。その距離があまりにも近くて、ドキドキしてしまった。それにこの御仁、眩しいのだ。後ろから太陽が後光のように差していることもあるが、金髪がキラキラしすぎて目に痛いほどだ。

「あの……すみません、離してください……なんでこんなこと……いきなり……」

身体を起こし、一応は離れてくれた榊を警戒しながら辺りを見回す。

白い壁に、白いカーテン、白いベッド。そして独特の消毒液の匂い。薫の左手には点滴の針が刺さっている。どうやら今までベッドで寝ていたらしい。おまけに浴衣のように前で重ねるタイプの、ピンクの病院着を着せられているので、ここは病院で間違いないだろう。

ふと、違和感を覚えて頭を触ると、額に包帯が巻かれていた。

ずいぶん外が明るい。カーテンの開いた大きな窓からは、透き通った青空に一筋の飛行機雲が見える。

その部屋で榊は、薫を凝視してくるのだ。しかも、まるで何かに怯えたように。

「……薫？ 俺のことわかるか？ わかるよな？」

「え？ わかりますよ、榊様ですよね？ 先日お掃除のご依頼いただいたお客様の……。あの……宅配クリーニングでもお会いしましたし、さすがに覚えています」

「っ！」

榊は、その綺麗な顔をぐしゃりと歪めると、何か言おうとした。しかし、結局何も言わず、枕元にあつたナースコールを手に取りそれを押す。

「もしもし、どうされました？」

何度かのコール音の後に、壁に設置されたスピーカーから看護師らしき女性の声が聞こえてくる。榊は薫を見つめたまま、マイクに向かってゆつくりと言った。

「榊です。妻が目覚めました。少し様子がおかしいので、先生の診察をお願いします」

（え……？ 今……なんて？ 妻……？）

看護師の返事を聞きながら、榊は薫から視線を一ミリも逸らさずに手を握ってくる。温かいのに震えているその手を、薫は振りほどくことができなかった。

彼の青い瞳にじっと見つめられるのが少し怖い。透き通ったその目に、心の奥まで見透かされそうだ。

「薫……。俺は確かに薫の顧客だったこともあるけれど、俺達は半年前に結婚したんだよ」

「結婚？」

（結婚って——誰と誰が？ まさか……わたし？）

自分と結婚がどうしても結びつかない。

薫は二十三年間生きてきて、今まで彼氏のひとりもいなかった。恋をする気になれなかったのだ。大学在学中に両親が車の事故で他界してしまい、薫は当時中学二年生だった弟の和志かずしとふたりで生きていかななくてはならなくなった。

もともとお金に余裕がある暮らしではなかったので、両親の死後、生活は一層厳しくなった。築四十年の西陽にしびのきついボロアパートで、姉弟で身を寄せ合って暮らす生活。

まだ中学生だった和志を働かせることなんてできるはずもなく、薫は日々、大学とバイトに明け暮れる生活を送っていたのだ。

そんな中、和志はこの春、姉孝行にも特待生で高等専門学校に入学してくれた。遠方のため寮生活となり、頻繁ひんぱんに顔が見られないのは残念だが、仕方ないだろう。

和志は学校を卒業したらそのまま就職するつもりらしい。お金を気にしての選択なのは明白だった。

優秀なものにもつたいない。和志を大学に行かせてやりたかった。

和志が卒業するまであと五年。この間にまとまったお金を貯めたい。そのために、薫は正社員の仕事であるハウスキーピングとは別に、夜間の宅配クリーニングのバイトもしていたのだ。

そんな自分が結婚？

確かに榊は王子様のように、初めて会った時に「かっこいいな」と思いはしたが、それは多分、十人中九人が思うような一般的な感想だと思ふ。それほどまでに榊は魅力的な外見の持ち主だった。だいたい結婚というものは、ふたりの意思でするものはずだ。こんなに素敵な人が、よりによって自分のような女を選ばずがない。美人でもない、特別な才能があるわけでもない、お金もない、生活に追われているだけの干物女を。

「えと……あの、意味がよくわからないのですが……。わたしが結婚……？」

困惑顔で零すと、榊は薫の手を握ったままベッドサイドの椅子に座った。そして優しい声色で話しかけてくる。

「薫……。落ち着いて聞いてほしい。君は昨日の夜、車に撥ねられたんだ。大きな怪我はなかったけれど、頭を打った。検査をして異常はなかったんだけど、もう一度先生にきちんと診察してもらおう。でも薫、これだけは覚えておいて」

榊は一度言葉を切ると、真剣な表情で薫を見つめてきた。

「君は幸村薫だったけれど、半年前に俺と結婚して、今は榊薫になったんだ。君は俺の奥さんなんだよ」

（わたしが奥さん!? さ、榊様の……?）

動揺する薫をよそに、彼は握ったままの薫の手を自分の頬に当てた。そしてゆっくりと目を伏せる。青くて綺麗な瞳が瞼の裏に隠れるのと同時に、彼の頬を一筋の涙が伝った。

「よかった……薫が目を覚ましてくれて……本当に……本当によかった……。このまま目を覚まさなかつたらどうしようかと思ってた……」

（え……。そんな……。そんなことを急に言われても……）

動揺は消えないが、しかし榊が嘘を言っているようには見えなかった。彼の声は小さい上に震えていて、ところどころ聞き取れない部分もあったが、それが余計に彼の言葉と涙が偽りないものだと感じさせてくれる。彼は心から心配してくれているのだろう。

そうか、自分は事故に遭ったのか……。だが、それすらも薫は覚えていない。

（わたしが……おかしいの?）

薫は急に不安に駆られた。自分が「幸村薫」という記憶はあるのに、「榊薫」になった記憶がない。でも目の前の榊は自分の夫を名乗り、こうして涙を流している。

榊の言葉も態度も嘘には思えないが、そのまま信じてしまうのが怖い。「そうなんですか」と、鵜呑みにできるはずもなく、頭がぐちゃぐちゃになって鋭い痛みが走った。

だが痛みよりも、自分の知らない自分がいることが薄気味悪い。カタカタと身体が震えてきた。

「薫?」

「わ、わたし……ごめんなさい……ごめんなさい……わ、わからなくて……あの——」

震える薫の肩を、慌てて立ち上がった榊が抱いてきた。

「混乱させてしまったね。俺が悪かった。さあ、先生が来るまで横になっていよう」

榊は薫をベッドに寝かせると、丁寧に布団をかけてくれる。彼は微笑み、また手を握ってきた。

「薫。大丈夫だ。俺が付いているから何も心配いらない」

はつきりと強く言い切ってくれる彼を見てみると、頭痛が治まってきた。

結婚についてはまったく気持ちを追いつかないし、信じることもできない。だが彼は、悪い人ではない。それは信じられる気がする。ハウスキーピングの時は紳士的に応対してくれたし、同じ日に宅配クーリーニングで再会した時は驚いて笑い、「頑張ってるね」と声をかけてくれた。

(それは覚えてる……間違いないはず……)

この記憶は疑いたくない。

なぜならあの時の彼の優しい笑顔に、ぽっと胸が温かくなったから――

「部分健忘ですね。事故のショックで記憶の一部が飛んでしまったのでしよう」

診察に来てくれた中年の男性医師は、事故の直前直後の記憶がなくなるのはよくあることだと言う。医師の診察は、治療というよりは記憶を辿る問診という感じだった。身体の検査は薫が気を失っている間に終わったのだそうだ。骨折もなく、膝や腕に打撲や擦り傷が少々あるものの、どれも軽傷。ただ額の傷は深く、三針縫ったと聞いた。

頭を強く打っているからCTを撮ったのだが、結果は異常なしで、あとは薫の目が覚めるのを待っていたという状態だったらしい。

結局、薫の記憶は約一年前で止まっていた。現在、薫は二十三歳ではなく二十四歳になっており、

高専に入学したばかりと思っていた和志も、もう二年生になっているのだそうだ。

そしてこの一年の間に、薫は榊と結婚したと言う。

出会って半年のスピード結婚。

自分がそんな選択をしたなんて信じられない。だが、「榊薫」になっている免許証を見せられ、薫は動揺しながらも、榊と結婚した自分を認めないわけにはいかなかった。

「外科的には脳に異常はありませんから、あまり深刻に考えないようにしてください」

「よかった……」

無言の薫の代わりに応えたのは、榊だった。彼は安堵の表情を浮かべて、こちらを見つめてくる。

「先生、妻の記憶はどれくらい戻りますか？」

「はつきりしたことは言えませんが、事故による記憶障害はだいたい二三日で回復することが多いです。稀に記憶が戻らない方もいらっしゃいますが、奥様の場合、一年より前のことはしっかりと覚えていらっしゃいますから、日常生活に戻るのには容易かと思えますよ。なんにせよ、徐々に回復するものですから焦らないように。気長に構えてください。日常生活を送っていくうちに、ぽっと思ひ出すみたいですから」

医者が安心させようとしているのはわかっているのだが、薫は内心がっかりした。

(……できる治療は何もないってこと……?)

それでは二三日経っても思ひ出せなかつた時、どうすればいいのだろうか？ と、不安が募る。「まだ混乱されているみたいなので、念のためにもう一日入院ときましようか。大丈夫であれば

明日退院しましょう」

「わかりました。ありがとうございます」

医師と看護師が出ていき、薫はベッドに座ったまま小さくため息をついた。柵の存在はとも頼もしくあるのだが、側にいられることには慣れていないし、違和感がある。

(でもそれはわたしの記憶がないから——なんだよね……)

ベッドサイドの椅子に座っている柵をちらりと盗み見る。彼はスマートフォン画面を注視していた。しばらく難しい顔をしていたが、軽く金髪を掻き上げると立ち上がった。

「薫。会社から電話がかかってきていたから、ちよつとかけ直してくるよ」

薫が救急車でこの病院に運ばれてきたのは、昨日の夜だという。柵はそれから一度も家に帰るとなく薫の側にいたらしい。今日は五月二十八日木曜日だと医師から聞いた。

彼に仕事を放り出させていることが申し訳なくて、薫は静かに頭を下げた。

「本当にすみません。お仕事があるのに、柵様にはお手数をお掛けしてしまつて……」

「何言つてるんだ。夫が妻の側にいるのは当たり前のことだろ？ あと、柵様はやめてほしい。祟らつて呼んでくれないか。俺達は夫婦だ。たとえ薫が覚えていなくても……ずつと夫婦だ……」

彼はそう言うと、ジャケットのポケットから何かを取り出し、薫の左手を取った。そしてそのまま、左手の薬指に白銀に輝く指輪をはめてくる。

「これは……」

「結婚指輪だよ。CT検査の時に外すように言われたんだ。薫のものだから付けておいて」

薫は自分の左手にはめられた指輪をじつと見つめた。細身のプラチナリングで、緩やかなVの字を描いたフォルムだ。中央に小ぶりのダイヤモンドが一粒埋め込まれている。そのクラシックなデザインはとても繊細で美しかった。同じデザインのもが柵の左手の薬指にもある。でも見覚えは——残念ながらない。

結婚していたというのだから、結婚指輪があるのは当然のことなのだろう。けれどもこれが本当に自分の指輪だという実感が湧かない。ハウスキーピングという仕事柄、薫には指輪を付ける習慣がなかった。だから指輪を付けるという行為自体、違和感しかないということもある。

(でも……わたしのなんだよね、きつと……。だつてサイズがピッタリ……)

いつの間にか一年の時が経ち、金髪碧眼(へまが)の夫がいて、覚えのない指輪を自分のものだと言われる。まるでドッペルゲンガーのようなそっくりさんと自分の人生が入れ替わってしまったかのようにではないか。

二十三年間生きてきた記憶がしつかりある身としては、一年分の記憶がないのだと言われても、周りが何か勘違いをしているのではないか？ という思いが拭い切れない。

薫の困惑が伝わったのか、柵は優しく目に細めると、薫の左手を持ち上げて、はめたばかりの指輪に口付けてきた。

その流れるような仕草に、薫の胸がドツと高鳴る。

「な……」

「混乱してるよね。でも大丈夫だから心配しないで。俺は電話が終わったら何か食べてくるよ。薫

の食事がどうなってるかも看護師さんに聞いておく。できるだけ早く戻ってくるから」

樺はそう言って病室を出ようとした。が、何かを思い出したのか、ふと振り返る。

「あ、そうだ。俺も気が動転していたから、まだ和志くんに連絡していなんだ。連絡したほうがいいよな?」

弟の名前を出されて、薫は慌てて身を乗り出した。

「やめてください!」

「どうして? 事故に遭ったんだ、話しておいたほうが——」

樺の言い分もわかるのだが、薫達姉弟の両親は車の事故で他界している。更に姉である自分まで事故に遭ったと知ったら、和志は動揺したまま病院に来ようとするに違いない。そんな状態では、今度は和志が事故に遭いかねないではないか。

「大丈夫です。先生だって、記憶は二、三日で戻ることが多いって仰っていたじゃないですか。すぐに治るかもしれないのに、大袈裟にしないでください!」

薫の言葉を聞いて、樺は僅かに苦い顔をしながらも最後は了承してくれた。

「わかったよ。俺からは言わないでおくから、薫の好きにするといい」

あまり強くは言わなかった彼に感謝して、薫はふと思いついたことを聞いた。

「あの、連絡で思い出したんですが、わたしの職場への連絡は——」

「職場? 薫は専業主婦だよ。俺と結婚して、ハウスキーピングの仕事もクリーニングのバイトも辞めたんだ」

「そ、そうなんですか……」

働くことしか考えられなかった自分が、仕事を辞めた?

言葉が続かない薫に、崇弘は軽く手を振った。

「じゃあ、行ってくるよ」

「は、はい。いつてらっしゃい」

ひとり取り残された薫は、シンと静まり返った病室でまたため息をついた。

先ほどまで薫の左腕に刺さっていた点滴は栄養補給のためのブドウ糖だったそうだ。あまり空腹でないのも点滴のせいだろう。

薫はよろよるとベッドから下りた。この病室は個室で、トイレとシャワールームが完備されている。ありがたいことだが、贅沢で気が進まない。

(大部屋でいいんだけどなあ……。この部屋高いんじゃないのかなあ……)

とりあえず今のうちに手洗いをすませようかとドアを開ければ、鏡に映った自分の顔が飛び込んでいった。

洗面台の上に取り付けられた鏡を食い入るように見つめる。幼顔で目が大きい、見覚えのある自分の顔——なのに違和感がある。その違和感の正体は髪だった。

黒髪が胸に付くほど長く伸びている。今まで薫は、仕事の邪魔にならないよう、後ろで一つにくくれる最低限の長さにしていた。だが今は、かれこれ十五センチは伸びているだろうか。こんなに髪を伸ばしたことはない。

(本当に一年経ってるんだ……)

自分はこの不気味な現実を受け止めねばならないのか——受け止めることができるだろうか？
手洗いをすませた薫は、何かがくり抜かれたような空虚な思いを抱えてベッドに戻った。
自分が記憶と同時に何を失ったのか——それはなんとなくわかる。
失ったのは想いだ。

柷と結婚までしたはずなのに、その時に抱いた愛が今の自分にはない。
確かに初めて会った時、彼に好感を持った。その想いは覚えている。

だがそれが、恋や愛にまでどう繋がっていくのか。自分が——自分達がどんな恋愛を辿って結婚にまで至ったかがわからない。

どっちが告白したの？ どんなところにふたりで行ったの？ どんな結婚式をしたの？
指輪を眺めてみても、何も思い出せない。

(……柷様に申し訳ない……)

医師は「日常生活に戻るのには容易だ」と言ったが、果たしてそれは本当だろうか？ 二十三歳の薫の日常と、二十四歳のそれは、あまりにも違うように思える。

ベッドの端に腰を下ろしたままうな垂れていると、いつの間に陽が傾いたのか、強い西陽が射し込んできていた。壁時計を見れば、もう十八時になっている。眩いそれは、薫が知っている夕日そのものだ。

(お日様はわたしが覚えているままね……)

そんな黄昏れたことを考えていると、コンコンとドアがノックされた。

(柷様かな？)

「どうぞ」

ドアを開けたのは、ショートカットの若い女性看護師だった。手には食事が載ったプレートを持っている。柷が食事について聞いてくれたからだろう。

彼女が柷でないことに、薫は自分でも驚くほどがっかりしていた。

考えてみれば、柷が出ていってそんなに時間は経っていない。食事をしてくると言っていたから、まだ時間がかかるだろうに。

(わたしっしたら……)

ひとりで寂しかったのだろうか？ 無意識に柷を求めていた理由を深く考える前に、看護師がサバサバした感じで話しかけてきた。

「失礼します。夕飯の時間ですよ。旦那さん、まだ戻られてないの？」

「あ、はい……。あの、食事に……」

薫が答えると、彼女は食事のプレートをベッドを跨がせた机に置いて、くすくすと笑った。

「旦那さん、一晩中あなたに付きつきりだったものね。『奥さんは大丈夫ですよ』って言っても、この世の終わりみたいな顔をして、ずっとあなたの手を握っていたのよ。あんなイケメンに愛されて羨ましいわ。旦那さんのためにも、早くよくなつてね」

病室を出ていく看護師にぎこちない笑みを返して、薫は「はあ……」と、重たいため息をついた。

そんなに心配してくれていたのか、彼は。嬉しい気持ちは確かにある。しかし、それを上回る罪悪感が襲ってきた。

自分を愛してくれている人を忘れるとは、なんて薄情な女なのだろう。彼を愛したからこそ結婚したはずなのに、今はその気持ちさえも見失っている。

もしも自分が好きな人に忘れられたら——そう思った時、先ほど見た榊の悲しそうな顔が脳裏に浮かんで、胸が軋んだ。

自分の足元があやふやな恐怖と、未来に対する不安。自分がなくなったかのような喪失感。そして何より、榊への罪悪感で胸が押しつぶされそう。じわっと目に涙が浮かぶ。と、その時、再びドアがノックされた。

「あ、はい」

また看護師だろうか？ そう思って急いで涙を拭いていると、入ってきたのは榊だった。

「薫、どうしたんだ？」

手に買い物袋を下げた榊は、慌てて薫の側に寄ってきた。そして薫の頬に残る涙の跡を見つけたのか眉を寄せる。

「泣いてるのか？ 何か……あった？」

優しい声色だった。でもその声色とは違って、恐々とした表情で薫の顔を覗きこんでくる。

ああ、この人も今の状況が怖いんだなど、薫は漠然と思った。

「薫？」

「ごめんなさい……忘れてしまって、ごめんなさい……わたし……」

自分の気持ちがあきこまないながらも言葉になって出てくる。どうしたらいいのかわからないのだと訴えると、彼は買い物袋をベッドに置いて、椅子にも座らずに薫の手を握ってきた。

「謝らないで……。事故は君のせいじゃない」

「でも——」

たとえ事故に遭ったとしても、愛する人のことくらい覚えていたかった。いや、覚えているべきだったのだ。薫はそう言おうとしたが、榊に遮られた。

「謝らないといけないのは俺のほうだ。君が事故に遭ったのは俺のせいだ。俺が側にいたのに、君を護れなかったから……」

状況がよく呑み込めずに首を傾げると、榊は薫の手を自分の頬に当て、事故当時のことを話してくれた。

「出掛けるところだったんだ。夕飯を食べにね。外に食べに行くのは久しぶりだったから、君は嬉しかったみたいだった。俺が仕事の電話をしながらもたしている間に、君は先にマンションを出て……車に撥ねられたんだ……」

「そう……だったんですか……」

薫が育った家庭は裕福とはとても言えなかったから、子供の頃から外食なんて滅多になかった。それは両親の死後も同じで、弟とふたり、慎重しやかな食生活だったことは覚えている。だから外食に連れて行ってもらえるようになったら——今、榊が言ったように大喜びするに違いない。

(なんて馬鹿なわたし)

「……食い意地張ってたんですぬ」

榊を安心させたくてくすつと笑ってみせると、彼も少し笑ってくれた。

「君の作る料理は最高だったよ。でもたまには家事を休んでリフレッシュしてほしかった。それが、まさかこんなことになるなんて……。本当にごめん。側にいたのに、君を護れなかった」

心底悔いるように言われて、薫はゆっくりと首を横に振った。

「榊様のせいじゃありません。わたしの運が悪かっただけです」

「薫。榊様はやめてって言っただろう？ だいたい薫だって榊なんだから」

「あ……ごめんなさい」

薫は慌てて口を押さえて謝る。すると彼は、薫の手を握ったまま首を傾げた。

「た、か、ひ、ろ。はい。言ってごらん？」

期待に満ちた眼差しを向けられて、薫は困惑と気恥ずかしさから目を逸らした。彼は何かと距離が近い。ただでさえ日本人離れた顔立ちを、ずいっと近づけてくるのだ。

(か、顔が近いよお。もうちよつと離れて……！)

と、思っても言えない。榊は薫に対して、己の妻との距離で接しているだけなのだろう。離れてほしいだなんて言ったら、彼がまた悲しむのは目に見えている。

(よ、呼べは喜んでくれるのかな？)

薫はチラチラと榊を見ながら、緊張した唇を震わせた。

「た、崇弘……さん……」

緊張しすぎて小さな声になってしまった。ちゃんと聞こえただろうか？ そう思って、様子^{うかが}を窺うように見ると、笑った榊——崇弘の顔があった。

(あ、……かわいい……)

彼が綺麗な人だというのはわかっていたのだが、笑顔はまた違った。青い瞳が見えなくなるほど目を細くして、白い歯を見せて笑っている。普段は王子様風なのに、この時ばかりは少年のように無邪気だった。

「嬉しいよ、薫。ありがとう！」

飾り気のない言葉だったが、そのぶん真つ直ぐに伝わってくる。彼の言葉が心に染み入るのと同じに自分の顔が熱くなっていくのを感じて、薫はさつと顔を背^{そむ}けた。だが崇弘は薫の頬を両手でむぎゅつと挟みこむと、やや強引に自分のほうを向かせる。

「じゃあ、もう一回言ってみようか。スムーズに言うように練習」

「ええっ!? 練習!？」

「だってさつきは声が小さかったから」

まさかそんなことを言われるとは思ってもみなくて、薫が驚きに目を見開くと、崇弘はまた屈託なく笑った。

「呼んで」と、囁^{ささや}くような声でせがまれる。しかも息がかかりそうなほど近い。ただでさえ熱くなっていた顔が、茹^{あせ}でだこみたいに真っ赤になった。

「は……離して、ください……」

「駄目。また呼んでくれたら離してあげるよ」

(な、なんでえ)

薫は恥ずかしいのと緊張とで、視線が定まらない。まともに崇弘の顔を見ることができないのに、彼は視線を合わせようと顔を近づけてくる。しかも、両手で頬をむにむにと摘まんでくるのだ。これはもう、彼が納得するまで呼ぶしかないのかもしれない。

「はい。言ってみて」

「ひやくひやくひやくひやくしゃあん」

呼ぶ時に崇弘が頬をむにむにするものだから、ちゃんと呼べない。

「プププ……もう一回」

「ひやくひやく……もおっ！ 崇弘さんっ！」

崇弘の両手を払いのけて、はつきりと彼の名前を呼ぶ。すると崇弘は笑いながら薫を抱きしめてきた。面白がっていたのが丸わりの彼に、素直に抱かれてやるのが癪で、プイツとそっぽを向く。けれども崇弘は薫の頭を優しく撫でるのだ。

「はは。ごめん、ごめん。薫があんまり可愛かったから、つい」

「……」

崇弘という存在をどう捉えればいいのかわからない。可愛いと言われればドキドキして、こうやって抱きしめられると、彼のぬくもりと鼓動が身体に染み入ってくる。それが決して嫌ではないのだ。

(わたしは……記憶を失くす前、ずっとこうしてもらっていたのかな……?)

薫がそろそろと顔を上げるのとはぼ同時に、崇弘がポツリと呟いた。

「ああ、やっぱり薫だ……。俺の薫だ……」

「愛おしい」という感情を隠そうともせず、青い瞳が熱く見つめてくる。なぜかチクンと胸が痛んだ。崇弘が自分の中に別の誰かを探しているように感じたのだ。

崇弘の妻である薫——それは、他の誰でもない薫自身のことらしいが、まだその自覚は持てない。かといって崇弘を拒絶することも薫にはできない。

(早く記憶が戻ればいいのに)

そうすれば、崇弘を愛せるのだろうか。いや、彼を愛する気持ちを取り戻せるのだろうか——

「そうだ。ここで食べようと思って、コンビニで弁当を買ってきたんだ。薫も食事がきたんだね。じゃあ、一緒に食べようか？」

薫を離れた崇弘は、気を取り直したように、買い物袋を開けはじめた。

崇弘のぬくもりが離れたことに、五分の安堵と五分の寂しさを感じながら薫は平静を装う。

(さ、寂しい？ そんなはずは……。きつとまだ動揺してるのよ)

「あ、はい。一緒に食べましょう。あの、ところでお仕事は大丈夫でしたか？」

会社から電話がかかってきていたことが気になって聞くと、彼は「大丈夫だよ」と頷いた。

「さすがに今日明日は休みを取るよ。土日は元から休みだけど、月曜からは出勤になると思う」

「すみません……休ませてしまつて……」

申し訳なさに拍車がかかる。肩を縮こまらせながら俯げば、崇弘がまた宥めてくれた。

「自分の奥さんが怪我をしたんだ。こんな状態の時くらい、休んだってばちは当たらないはずだろ？ 薫、俺は君を支えたい。側にいたいんだ。これは俺の意思だから、君が謝るようなことじゃない。——あ、これ。コンビニで適当に買ってみた。よかったら使って」

袋ごと受け取り中身を見る。中には一泊二日用と銘打ったメイク落とし入りスキンケア商品と、旅行用ミニボトルのシャンプーとリンスのセット。それからショーツが入っているではないか。

「~~~~っ！」

男の人に女性用の下着を買わせてしまったことが、申し訳なくて恥ずかしくて堪らない。でもとても助かったことは事実だった。

「あ、ありがとうございます……」

「退院の時に着る服は明日持つてくるよ」

「あ、は、はい」

崇弘は自分の膝の上で弁当を開けた。彼が買ってきたのは、タルタルソースがたっぷり乗った白身魚のフライ入りの海苔弁当。薫の病院食は、五穀ごはん、ほうれん草のお浸し、高野豆腐と野菜のごま酢和え、オクラソースが乗ったマグロのステーキ、そしてわかめと麩の味噌汁だ。

「冷めちゃったかな？ 食べようか。いただきます」

手を合わせて、それぞれの料理に箸を伸ばす。だが、もともとあまりお腹が空いていなかった薫は、お味噌汁を一口と、五穀ごはんを一口食べただけで手を止めた。

マグロのステーキには惹かれるのだが、どうも完食できる気がしない。

「どうした？ 食べないの？」

「点滴のせいかなとは思いますが、実はあまりお腹が空いてなくて……」

正直にそう打ち明けると、崇弘は手の甲で薫の頬をそっと撫でてきた。

「無理はしなくていいけれど、もう少し食べなさい。点滴だけで身体にいいはずはないんだから」

「……はい」

優しく叱ってもらえたのがなぜか嬉しい。両親が他界してから、こんなふうに薫を叱ってくれる人がいなくなっていたからかもしれない。

「もう少し食べます」

「ん。よし、俺が食べさせてあげよう」

崇弘は薫の箸を取り上げると、ほうれん草のお浸しを一口分、口の前まで持つてきた。

「はい、あーん」

「え……えと……あの……」

「ほら、早く食べて。醤油が零れるー」

困惑しているうちに急かされて、薫は慌てて口を開けた。しゃきしゃきした歯ごたえを味わいながら咀嚼すると、崇弘が満足そうに頷いて次の料理を口に運んでこようとするではないか。

「も、もう……自分で食べられますから……。崇弘さんにご自分のを……」

と言ってみたのだが、彼はちっとも箸を返してくれない。

「俺のことは気にしないで。はい、あーん」

(うろうう……恥ずかしいよお……)

誰が見ているわけでもないのだが、人にものを食べさせてもらっているという絵面(えづら)がどうにも恥ずかしい。それに、記憶も戻っていないくせに、崇弘に甘えてもいいものなのだろうか？ だが当の崇弘は、薫が食べるととても嬉しそうににこにこしている。

彼が悲しい顔をせずに笑ってくれるのなら、お腹いっぱいでも食べたほうがいいのかもしれない、という気になってくるから不思議だ。でも、どうすれば彼が一番喜んでくれるか、薫はわかっていた。

(早く崇弘さんのことを——この一年のことを、全部思い出さなきゃ！)

結局薫は、崇弘に勧められるがまま、この日の夕食を全部食べたのだった。

2

翌日。朝食が終わった九時前に崇弘は病室にやってきた。昨日はスーツだった彼も、今日は長袖のシャツにスラックスというラフな出で立ちだ。手には紙袋が二つある。

「おはよう、薫。どう？ 具合は」

「た、崇弘さん。お、おはようございます」

薫は近づいてきた崇弘を十秒ほどじっと見つめて、視線を下げた。

「……ごめんなさい……わたし、まだ思い出せていません……」

医師が「事故による記憶障害はだいたい二、三日で回復することが多い」と言ったから、昨日の夜はそれを期待して眠った。しかし、朝目覚めてからも変化はまったくなかった。崇弘の顔を見れば何か思い出すかもしれないと思ったのだが、どうやらそれもなかったようだ。

謝る薫に、崇弘は優しく微笑みかけてきた。

「いいんだよ、薫。気にしないで」

近くに来た彼は、うなだれる薫の頭を何度も何度もゆっくりと撫でてくれる。その心地よさに誘われるように顔を上げれば、青い瞳が蕩(よ)げそうなほど優しい眼差しで見つめていた。彼があまりにも素敵で、その視線を正面から受けるのが恥ずかしくなってしまう。薫は慌てて目を伏せた。

「包帯、取れたんだね」

頭に巻かれていた包帯は、昨日のシャワーの前に、看護師に取ってもらった。今は縫った傷口に肌色のテープが貼られている。それを伝えると、彼は「よかった」と言って、持っていた紙袋を手渡した。

「はい、服。こっちは靴ね」

「あ、ありがとうございます」

薫が受け取ると、彼は壁時計に目をやった。

「九時から会計が開くって聞いているから、ちょっと行ってくるよ」

入院費の支払いに行くつもりなのだろう。この時になって薫は慌てた。薫には持ち合わせがない事故に遭った時に鞆を持っていたらしいのだが、「スマホのバッテリーも切れているし、明日の退院の時の荷物を減らすために持って帰るよ」と崇弘に言われたから、貴重品も含めて全部彼に預けていたのだ。

「あ、あの……お金……」

「薫。俺達は結婚してるから、財布は一緒だよ。何も気にしなくていいの」

そう当たり前のように言われても、はいそうですかと素直に受け入れられない。それは薫が結婚したという事実をきちんと受け止めきれない証拠でもあった。

落ち着かない気はしながらも、薫は頷いた。

「……はい……。ありがとうございます」

「ん。じゃあ、行ってくるね。終わったらまた来るから、着替えておいて」

「はい。わかりました」

ひとりになった薫はベッド周りにカーテンを引くと、崇弘から受け取った紙袋を開けた。カーキ色で七分袖のカットソーと、足首まで長さのある白のロングスカートが一番上に乗っている。

（わあ……コーデイネットしてきてくれたのかな）

この服に見覚えはないが、柔軟剤の匂いがあるから新品というわけではなさそうだ。

仕事の時にパンツスタイルだからと、休日にはスカートで過ごすことが多かった。一年経ってもそう急に趣味は変わるものでもないのだろう。これは自分でも選びそうな服ではある。服の下には、

茶色の紙袋が入っていた。

開けてみると、中には白地にピンクの花柄のブラジャーと、セットのショーツ、更にはレースのキャミソールが入っていた。

「こ、れ……わたしの……?」

薫は一気に赤面した。

躊躇いながらもブラのタグを見ると、サイズはCの70。薫と同じだ。昨日、コンビニで買ったと思しきショーツがパッケージに入ったまま渡されたことを考えれば、これらは崇弘が家から持ってきてくれたのだろう。つまり、記憶喪失になる前の薫が使っていた衣類ということになる。

（……可愛い路線を選ぶあたり、わたしっぽいチョイス……な、気がする……）

薫は衣類に強いこだわりがあるわけではないが、なんとなく買った物でもテイストが似通っていることが多々ある。こと下着に関して言えば、白やピンクといった可愛い系を買っていた。ショーツとセット買いするのも常だ。

夫婦なんだと言われても、まだ実感が持てていない崇弘に下着類まで用意されることに対して、どんな反応をすればいいのだろうか？ 助かってはいるが、恥ずかしくて仕方がない。

着替えてみれば、当然のこのように、サイズはジャストフィット。もう一つの紙袋から薄茶色のミュールを出して履けば、これまたピッタリだ。

（これ、全部わたしのなんだろうなあ……まったく覚えがないけれど……）

今まで着ていた病院着を畳んだ薫は、カーテンを開けてベッドに腰を下ろした。

「はあ……」

思わずため息が零れてしまう。昨日から何度ため息をついたことか。

早く思い出したい。思い出して崇弘と向き合えたならどんなにいいだろう。彼がくれる愛情と微笑みを、罪悪感というフィルターを通さずに感じる事ができたらいいのに……

(いつ、思い出せるんだろ……明日？ 明後日？)

薫がまたため息をつきそうになった時、病室のドアがノックされた。

入ってきたのは崇弘と、薫の主治医だ。

「先生とさつきそこで会ったんだ」

と崇弘が言った。

「榊さん、どうです？ 調子は」

医師の言う「榊さん」が、誰のことがわからずに、一瞬、キョトンとしてしまった。だが、彼が自分から視線を外さないことで「ああ、榊さんはわたしだったわ」と気付く。思わず苦笑いしながら、薫は首を横に振った。

「まだ……まったく……思い出せません……」

医師は「そうですか」と、言いながら自分の顎をさすった。

「まあ、昨日の今日ですからね。自宅に帰るというのも一つの刺激にはなります。でもそこで思い出せなかったとしても気落ちしないでください。まずは今までと同じ生活すること。そうしていくうちに、自然と思い出せるかもしれません。仮に思い出せなくても、日常生活には復帰できます。

「簡単と言われても、結婚している時の生活がわからないのだが——それを医師に言っても仕方がないだろう。薫は丁寧に頭を下げた。

「先生。ありがとうございます。何かあったら相談させてください」

「ええ。旦那さんが本当にいい方ですから、榊さんは大丈夫だと私は思っていますよ」

医師がそう言つて隣の崇弘を見る。彼は医師に向き直つて頭を下げた。

「妻がお世話になりました。しばらく家で様子を見てみます」

「そうしてください。では私はこれで。おふたりとも車には気を付けてくださいね」

車に撥ねられたことすら忘れてる薫に対する、注意だろうか。でも、頭をぶつけて記憶喪失になったのなら、もう一度頭を打ちつければ元に戻ったりはしないだろうか？

(電化製品じゃあるまいし、叩けば治るなんてことはない、か)

それよりも、悪化することだつて充分あり得る。医師が、無理やり思い出そうとしないようにと言つてくれたのは、そんな馬鹿なことをしないようにという意味だろう。

「じゃあ、行こうか」

促されて、薫は崇弘と共に病室を出た。

外に出ると、むわつと湿った熱気を感じる。梅雨入りを目前にして湿度が急上昇しているようだ。歩きながら、半歩先を歩く崇弘を見る。彼は薫の頭一つ分背が高く、しっかりとした肩幅でとても堂々としている。サラサラした金髪が本当に綺麗で見惚れてしまいそうだ。

(この人がわたしの旦那様……？ 本当に？ まだ信じられないよ……)

彼と一緒に歩くには、自分があまりにも平凡で釣り合わない気がする。

「どうしたの薫？ おいで」

「えっ、あつ……」

自分でも知らぬ間に歩調が遅くなっていたようだ。崇弘を見つめてぼーっとしていたなんて言えない。

差し出された彼の手に、恐る恐る自分の手を乗せた。

「すみません……歩くの遅くて……」

「いいや。大丈夫だよ」

再び歩き出した崇弘は、今度は少しゆっくりと歩いてくれた。

彼は車で迎えに来てくれたそうで、病院の駐車場に止まっているベンツのクーペへ案内された。シルバーの右ハンドル仕様。銀色のエンブレムが輝かしくて、崇弘に似合っている気がした。

「さ、乗って」

「お、お邪魔します……」

上質な本革シートに恐々としながら腰を下ろすと、崇弘は苦笑いする。

「うちの車だからそんなに緊張しなくて大丈夫」

(たぶん何度も乗ったことあるんだろうけど、覚えてないし……)

ぎこちなくシートベルトを着けてみるが、やっぱり覚えはない。

仕事柄、顧客の家に行く時には自分で車を運転していた薫だが、乗っていたのは掃除道具を積んだ会社のワンボックスカーだ。記憶にある中で、こんな高級車に乗ったことはない。

怪訝な顔できよきよと辺りを見回していると、エンジンがかかった。

「さ、帰ろうか」

「はい」と返事をしたものの、薫はふとあることに気が付いた。

「あの！ 帰るつてどこへ、ですかっ!？」

ガバツと腕を掴んできた薫に、崇弘は驚いたのか目を見開く。だが、次の瞬間には薫の両手を包むように握ってきた。

「薫。帰るのは俺達の家だ。結婚したから、一緒に住んでいる。ほら、君も仕事で来たろう？ あのマンションだよ」

結婚したことは昨日聞いていたし、今朝はこうやって服まで持ってきてもらったくせに、一緒に住んでいることまではとんと考えが及ばなかった。崇弘のマンションといえば、あの豪邸のような三十三階建てのマンションではないか。薫は半ばパニックに陥っていた。

「え？ えっ？ わたしが住んでたアパートは？」

「引き払ってるよ」

「えーっ!? ひ、引き払った!? お父さんとお母さんの位牌いははは!? 和志の荷物だつてあるのに!!」

ジタバタして叫ぶ薫の前にして、崇弘は握った手をポンポンと優しく叩いてくる。

「薫。薫。心配しないで。ご両親の位牌も、和志くんの荷物も全部うちにあるから」

「えっ? えっ?」

「薫、ちよつと落ち着こうか」

目を白黒させる薫の背中をよしよしとさすつて、崇弘は一旦車のエンジンを止め、シートベルトを外した。車内に沈黙が訪れ、彼の優しい声が響く。

「落ち着いた?」

「ま、まだ……ちよつと混乱しています……」

本当はだいたい、かなり、激しく混乱していたのだが、そう言うしかない。崇弘は「うーん」と悩ましい声で天井を仰いだ。

「俺と結婚したことはわかってくれたみたいだったから、一緒に住んでいることもわかってくれていると思っていたんだけど違ったんだな。ごめん。昨日、もっとよく説明すればよかったね」

「いや……スミマセン……その……」

(ううう……わたし、まだ頭が混乱してるのかな……)

昨日は与えられた情報を呑み込むのに精一杯で、きちんと理解することにまで及んでいなかったようだ。

崇弘は薫に向き直り、少し微笑んでくれた。

「俺らはごく普通の夫婦だったよ。だからもちろん一緒に暮らしてる。愛し合つてて……まあ俺のほうで惚ほれてるんだけど。付き合うのも俺から告白したし、プロポーズももちろん俺からだった。

俺は誰とも結婚する気はなかったんだけど、薫と出会ったら止まらなくて。押して押して押してのスピード結婚」

崇弘のような人に迫られる自分がとても想像できない。呆気にとられていると、彼は薫の背中に両手を回し、ぎゅうつと抱きしめてきた。

「君が俺を忘れても、俺は君を覚えてるし、愛してる。君がいない人生なんて考えられないんだ」

耳元で囁ささやかれて、顔どころか首筋や両手のひらまで真っ赤になる。崇弘は流し目で薫を見つめると、鼻先でツンと頬を突いてきた。

「あ……えと……」

「ふふ。さて、帰ろうか。俺の可愛い奥様。家でお茶でも飲みながら話そう」

崇弘の言うことはもつともなのかもしれないが、未だ混乱さみの最中なかにいる薫はオタオタしてばかりだ。崇弘はあやすように薫の頭を撫でると、自分のシートベルトを着けて車のエンジンをかけた。

「はい、出発」

崇弘の楽しそうな声と共に、車は滑なめらかに走り出したのだった。

三十分ほど車を走らせて到着したのは、見覚えのある三十三階建てのマンションだった。たった一年で街が大きく様変わりするはずもなく、ここに来るまでの道中は記憶に新しい。(当然だよね……わたしにしてみたら、つい数日前にここに来た感じなんだし……)

とはいえ、覚えのない建物もあった。マンションの徒歩圏内に二十四時間営業の大きなスーパーができていたのだ。これは半年ほど前にできたらしい。そう崇弘が教えてくれた。来たことがあるマンションではあるが、記憶の中ではそれも二度だけ。乗り込んだエレベーターも、言葉にはできない微妙な差異がある気がして落ち着かない。

このマンションはワンフロアにつき一世帯しかなく、全体的に静かだ。

「はい。ここが我が家だよ」

そう言っただけで案内されたのは二階の部屋。まるで金庫のような両開きの玄関ドアが、ピツという電子音を立ててカードキーで解錠される。ホテル以外でカードキーを見たことがない薫は、思わず、「ホテルみたい」と口に出していた。

「あはは！ それ、前も言っただよ。やっぱり薫は薫だね」

崇弘は軽快に笑うと、玄関を開けて薫を中に入れてくれた。空調が効いているのか、外とは違い湿っぽさがない。

「わ……」

玄関というより、玄関ホールをイメージさせる高い天井。床は白大理石。壁紙も、天井まで続く

はめ込み型の靴箱の戸も白くて、目が眩む。掃除するところなんてないんじゃないかと思ってしまうほど、綺麗に整えられた玄関である。おまけに広い。薫と和志が住んでいたボロアパートの玄関のざつと五倍以上の広さがある。この印象は、初めて来た時と同じだ。

「あ、相変わらずすごいですね……」

「そうかなあ？ 普通……っていう感じなんだけど。毎日見るとわからないな」

そう彼は屈託ない笑みで言うが、断言しよう。彼の感覚は麻痺している。戸建てでもこんなに広い玄関はそうそうない。

(玄関だけじゃなくて中も広いんだよなあ……ここ)

中に入ったことは一度しかないが、広さはよく覚えている。何せ掃除するのが一苦労だったから。依頼されたのは玄関、リビング、ダイニング、キッチン、フロアリング洗浄とワックスがけ。依頼内容は普通なのだが、もうひとりの女性スタッフとふたりがかりで、一般的な住宅なら四時間くらいで終わるところを、六時間もかかってしまったのだ。

時間はかかったが、崇弘は仕事を気に入らしく、また利用すると言ってくれた。

「さ、薫。入って」

「お、お邪魔します……」

促され、おやおすとミニールを脱ぐと、先にながっていた崇弘がまた笑った。

「薫。『ただいま』だろっつ」

「あ……」

薫自身にはここに住んでいた記憶はなくても、崇弘にとつては違う。彼にとつて、ここは奥さんどふたりで住んでいた家で、そして入院していた奥さんが帰ってきたのだ。更に言うと、その奥さんは、自分。

奇妙な感じはしたものの、薫は小さな声で「ただいま」と言ってみた。
「ん。おかえり」

出してもらったスリッパを履いて中に入る。玄関ホールの突き当たりで廊下が左右にわかれており、左手がリビング、ダイニング、キッチンだ。そこまでは知っている。薫は右手の廊下には進んだことがない。

崇弘の背中を追って、薫はリビングへと足を踏み入れた。

そこは記憶と大差ない、広々とした開放的なリビングだった。明るいナチュラルトーンのカラーリングで揃えられたL字のソファー周り。壁側には大型テレビが置かれ、大きなワインセラーもある。海が見える南側の窓からは、心地よい光が降り注いでいた。

少し家具が様変わりしたようにも感じるが、どこが変わったかまではわからない。

(……思い出せるかな……?)

きよろきよろと自分の記憶を刺激してくれそうなものを探す。すると、難しそうな顔をしている崇弘と目が合った。

「薫……どっつ？」

期待しているような、何かを恐れているような、そんな眼差しだった。思い出すことを強く望ま

れているのだと思う。しかし薫の頭の中は、ハウスキーピングの時に見た部屋と、今の部屋を比べているだけで、何かを思い出したわけではない。

「……ごめんなさい。まったく……思い出せません……」

静かにうなだれると、軽く首を横に振った崇弘が肩を抱いてきた。きつと、プレッシャーをかけたまいとしてくれていたのだろうか。

「いいんだ。気にしないで。とりあえず、座って。今、お茶を淹れよう」

「ありがとうございます……」

ダイニングテーブルに案内されて四脚ある椅子のうち、一番リビングに近い席につく。すぐに崇弘が冷たい麦茶を持ってきてくれた。それに口を付けていると、ダイニング横にあるサイドボードの上の写真立てが、ふと目に入った。

「あの写真は——？」

「ああ、これ？」

崇弘が立ち上がって写真立てを持ってきた。

木製のシンプルな写真立て。その中に収められているのは、シルバーのモーニングコートを着た金髪碧眼の青年と、純白のウエディングドレスを身に纏った——自分だった。

「これ……」

「結婚式の際の写真だよ。これは薫のお気に入りの一枚で、ずっとここに飾ってるんだ」

崇弘は薫が座った椅子の背凭れの上に肘をつき、写真を愛おしそうに眺めている。

薫も写真に釘付けだった。正装した崇弘は王子様そのものだ。広い肩幅に長い脚。職業はモデルですと言われたら、誰もが信じてしまうに違いない。彼は隣の花嫁と、対になる人形のようにびつたりと寄り添っている。

「綺麗だろ？ 薫……君だよ」

裾にかけてふんわりと広がったAラインのドレスで、首周りを繊細なレースが覆っている。まさしく正統派クラシカル。その王道さが薫を上品に見せてくれていた。

崇弘に腰を抱かれ、淡い色合いの薔薇のブーケを持ち、はにかみながらも幸せそうに笑っている。「これが、わたし？」

「そうだよ。ねえ、自分の髪が伸びていたことには気付いた？」

崇弘は後ろから薫の髪を触ってくる。髪の変化は薫に時間の経過を最初に気付かせてくれたものだ。だから素直に頷いた。

「出会った頃、薫の髪はあまり長くなかったんだけど、結婚式のために伸ばしたんだ。でもせっかく伸ばしたんだからって、結婚式が終わっても切らないでいたんだよ」

「そう……だったんですか」

結婚式の写真をじっと見つめる。花嫁の髪はふんわりとアップになっていた。この頃にはだいぶ伸びていたようだ。写真を見る限り、自分は幸せな結婚をしたのだろう。

（ああ、いいな……素敵。わたし、こんなに綺麗なドレスを着せてもらったのね）
思い出したい。彼との結婚式を。幸せだった自分を思い出したい。

だが、穴が空くほど写真を見ても、ちっとも思い出せないのだ。

「……ごめんさい、こんなに素敵な式を挙げてもらったのに。わたし……なんで思い出せないんだろ」

写真の中の自分にも幸せそうだったせいかわ、薫の目から涙があふれてきた。

写真を覆うガラスに雨が降ったようにぼつぼつと涙が落ちる。そんな中で、薫は背後から椅子の背凭れごと抱きしめられた。

「泣かないで、薫。薫が俺の奥さんなんだってことがわかってくれたらそれでいいんだ」

「崇弘……さん」

崇弘は薫の頬に自分のそれをびったりとくっつけて、宥めるように囁いてきた。

「大丈夫、大丈夫だよ。薫は悪くないんだ。謝る必要なんてないんだよ。自分を追い詰めたりするのはよそう？ 焦りは禁物だって、先生も言ってたじゃないか」

「……うん」

頬が触れたまま、包むように頭を撫でられる。振り向くことはできなかった。耳のすぐ横には崇弘の息遣いがある、心臓が甘く痺れてくる。

なぜだろう、こうやって抱きしめられるのが嫌だとは、微塵も思わないのだ。むしろ彼の体温に安心する自分がある。

それは薫にとって不思議なことだったが、崇弘は慣れた手付きで、何度も何度も繰り返し頭を撫でてくれた。

髪の間指を入れ、梳すくように丁寧に触る。時折、耳に指が触れるのがくすぐったい。彼を見ると、柔らかに微笑まれ、慌てて視線を外すはめになった。

王子様のような彼は、仕事まで王子様だ。新しい涙はもう流れなかった。

(わたしは……宗弘さんと本当に結婚していたんだ……)

指輪を渡されても半信半疑だったのに、写真を見てはじめて、本当だったのだと受け入れることができた。

自分は半年前に、この人と幸せな結婚をしたのだ。写真がそう言っている——

宗弘も薫も一言も発しないまま、しばらく時間が過ぎた。そうしていると、突然ピリリリッと高い電子音が鳴った。

「あ、ごめん。俺のだ」

すると宗弘の腕が離れて、距離が開いた。一気に失われたぬくもりに後ろ髪を引かれ、彼を振り返る。

「会社からだ。——はい、もしもし？」

律儀に断ってから宗弘は電話に出た。途端に、先程までの甘い空気が一気に吹き飛ぶ。

「——その件はわかった。新規でイギリスの派遣会社との委託契約の話が出ていただろう。そっちを先に進めてほしい。——それはこの間話した通り——そう、なら俺にメールを送っておいて。明日の朝までに見ておくから——うん、うん……」

漏れ聞こえてくる会話の雰囲気から、大切な話なのだというのはなんとなくわかる。しかも彼は、

指示を出す側のようだ。

(もしかして、宗弘さんって会社で偉い人なのかしら？ っていうか、何歳なの?)

まだ二十代後半から三十代前半に見える宗弘が、部長クラスだったりしたらすごいことだ。今日の仕事は休むと言っていた彼だが、電話がかかってくるほど忙しいのだろう。まだ午前中だし、今からでも仕事に行ったほうがいいのではないだろうか？

「あの、お仕事……忙しいんですか？ 今日、会社に行かなくていいんですか？」

宗弘の電話が終わったタイミングで聞いてみる。彼は笑いながらスマートフォンをポケットにしまった。

「ああ、休むことにしているから気にしなくていいよ」

「で、でも昨日もお休みして……」

薫だつて働いていたのだから、休みを取ることの難しさはわかっている。連日の欠勤となると一大事だ。

焦る薫を尻目に、宗弘はその豊かな金髪をさらりと掻き上げた。

「いいんだよ。俺の部下は優秀だから大丈夫。まあ、時々ああやって電話がかかってくるとは思うけど。それより、薫はここで暮らしていた記憶がないわけだから、覚えなさいといけないことがあるだろ？ 明日から土日でもともと休みだし、この三日間である程度覚えよう」

それは宗弘の言う通りだった。宗弘のこと、この一年の間に起こったこと、この家のこと。近所付き合いから親戚付き合いに至るまで、薫は何もわからない。思い出せないのなら、覚えなくては

ならない。それを教えてくれる相手は、崇弘以外にいないのだ。

薫は立ち上がると崇弘に向き合った。

「崇弘さんの言う通りですね。いろいろ覚えなないと。崇弘さん、わたしにこの一年のことを教えてください。そして、崇弘さんのことを……」

「OK。何が聞きたい？」

崇弘は気持ち嬉しそうに笑っている。急にたくさんのお話を聞いても覚えられないかもしれないから、薫はさつき気になったことから聞くことにした。

「崇弘さんはなんのお仕事をされているんですか？」

「俺の会社は『スタッド・アルト』っていう人材派遣会社なんだ。俺は代表取締役を務めている」「えっ?」

薫は目をしばしばさせながら、崇弘を見つめた。スタッド・アルトは知っている。日本全国、場所や職種を問わず仕事を紹介している、大手の派遣会社だ。正社員の傍ら、夜間の仕事を探していた時に登録したことがある。

結局、通勤途中で見つけた宅配クリーニングのアルバイトに採用されたので、スタッド・アルトを本格的に利用したことはなかったが、それでも感じがいい派遣会社だと思っていた。その代表取締役ということは――

「えっと……社長さん……?」

「そうだね」

「……」

さらりと言われた薫は、しばらくの沈黙のあと、盛大な悲鳴を上げた。

「えー……?」

「うん。以前とまったく同じ反応がありがとう。なんだか懐かしくて、すごく嬉しいよ」

崇弘は丸めた手を口元に当てて、愉快そうに笑っている。どうやら前も同じようなやり取りをしたことがあるらしい。

「えっと、崇弘さんっておいくつなんですか？」

「今年三十だ。俺の誕生日と薫の誕生日は実は二日違いなんだよ。俺が十二月十一日。薫は十三日だ。だから俺達の結婚式は、間を取って十二月十二日にしたんだ」

「ほえ……」

崇弘はダイニングテーブルの椅子に座り、薫にも隣に座るように勧めてくる。言われた通りに座った薫は、彼を凝視しながら尋ねた。

「なんで付き合うことになったんです? わたし達……」

昨日の段階でも不思議に思っていたことだったが、崇弘が社長と聞いてますます疑問が深まった。自分達はあまりに違いすぎる。

裕福な社長さん、しかも明らかに女の人が放っておかないであろう崇弘と、貧乏で地味女の自分が、どうして?

「薫は俺と初めて会った日のことは覚えているんだよね?」

「はい。昼間、ハウスキーピングでお会いして、同じ日の夜に宅配クリーニングでも会いまして……そこまでは覚えています」

「そう。俺も驚いたよ。同じ日に違うサービスで同じ人に会ったから。一瞬間同じ系列の会社かと思っただけ、まったく違う会社だったし、会社員をしながら宅配クリーニングでバイトしてるって聞いて、働き者だなあって感心したんだ」

崇弘は一度言葉を切ると、テーブルに頬杖をついて薫を見つめてきた。
懐かしそうにしながらも熱いその眼差しは、薫を捌め取るように向けられる。

「思えばその時から薫に惹かれていたのかもしれないね」

まだ自覚はなかったけれど、と付け足した彼は、クスツと笑った。

「次の日、気が付いたら俺は、薫が働いていたハウスキーピングの会社と、定期利用契約をしているんだよ」

「定期利用、ですか？」

確かに、薫が働いていたハウスキーピングの会社には、定期利用サービスがある。だがメインとなるのは、年に一回、大掃除での利用や、引越し前後の掃除利用、あとは水回りの溜まった汚れの洗浄や、エアコンのクリーニングといった単発だった。

「掃除コースの定期じゃなくて、家事代行コースの定期ね。あと、週一で、楽チンごはんコースもプラスしたんだ」

「それはすごいですね……」

家事代行はその名の通りの家事代行だ。掃除以外にも、日常的な炊事、洗濯やゴミ捨てなど、家事全般を請け負う。留守中に部屋に入る場合もあり、顧客との信頼関係が重要になるから、基本的にひとりのスタッフが専任という形で付く。

楽チンごはんコースは、食材の買い出しから調理までを一手に引き受けるコースだ。一度に一週間分の料理を作り置きして、依頼主は日々温めて食べる。この楽チンごはんコースを利用するのは共働きのファミリー世帯や、シルバー世帯が多い。ひとり暮らしでの利用がまったくないわけではないが、若い男性となると稀まれと言っている。こちらも専任スタッフとなる。

定期利用だから優待割引があるとはいえ、どちらも決して安くはない料金だ。

(すごいなあ……大口のお客さんだ)

驚きながらもそんなことを考えていると、崇弘はちゃんと薫を指差してきた。

「それで、薫に俺の専任になってもらったんだ」

「ええっ!? わたしですか?」

「指名したんだ。一週間に一回。土曜の夕方に薫がうちに来て、掃除して、洗濯して、ご飯を作ってくれていたんだよ」

彼の専任スタッフとして働いた約三ヶ月の間に、個人的にも親しくなっていたらしい。

「俺が風邪をひいて倒れたことがあってね。ちょうど薫が来る日だったんだけど、ものすごく心配してくれて。契約の日じゃないのに、次の日も様子を見に来てくれたんだ。嬉しかったし、なんかもう、薫が他の客の家に行って掃除したり家事したりしてるのに耐えられなくなって。おかしいだ

る？　それが薫の仕事だってわかってるし、俺のところに来てくれるのも仕事だからなのに、他の人のところには行ってほしくないって思ってしまったんだ。気が付いたら薫に告白してたよ」

薫は崇弘を凝視していた。驚きすぎて声が出ない。自分と崇弘の間に、そんな恋模様があったなんて、信じられない。でもここで彼が嘘をつく意味はないだろう。

(……………どうしよう。嬉しいかも……………)

他の客の家に行つてほしくないだなんて、かなりの独占欲だ。自分は崇弘にそんなにも強く想われていたのか。想われて、乞^こわれて結婚したのか。

「薫と一緒にいるとすごくホツとするんだ。結婚したいって思わせてくれた女性は君だけだったよ」

膝に置いていた手が崇弘に強く握られる。ハツとして顔を上げると、青く澄みきった彼の目があつた。

「愛してる」

ストレートな言葉に、薫はくらくらしながら唇を引き結んだ。そうしていないと、顔がだらしなく溶けてしまいそうだったから。

ドクドクと心臓が勝手に高鳴つて、顔に上がった熱が自分でも誤魔化せない。今にも頭の回線がショートしそうだ。

「薫」

静かに呼ばれたのと同時に、薫は崇弘の腕に抱き込まれていた。耳の裏から髪を掻き上げられ、

首筋があらわになる。そこにそつと崇弘の唇が触れた。

触れただけ。吸い付かれたわけでも、舐められたわけでもない。ただ微かに熱を感じるくらい、軽く触れただけ……。それだけで緊張して身体が動かなくなる。

結婚しているのだと言われても、その記憶がない以上、薫は男の人と付き合ったことのないままである。しかし相手は崇弘だ。彼は自分の夫なのだ。自覚はなくてもそれが現実である以上、受け入れなくてはならないのに——抵抗することもできず、声も出せず、ただ硬直することしかできなかった。それもこれも、彼が素敵すぎるせいだ。

(ああ……………わ、わたし、どうしたら……………えつと……………えつと)

パニックを起こしかけている薫に気が付いたのか、崇弘はスツと身体を離れた。

「ごめんね。驚かせたかな？」

聞かれても、「はい、驚きました」とは言えず、薫は黙つて俯^{うつむ}く。ただ顔がのぼせたように熱い。いや、顔といわず、身体中を熱が包んでいる気がする。

(な、何か言わなきゃ……………！)

でも、うまく言葉が出ずに俯いたまま視線を泳がせていると、崇弘がまた手を握ってくれた。

「そうだ薫、部屋を案内しようか？」

「部屋……………？」

おずおずと顔を上げると、彼は少し笑う。そんな彼の眼差しはとても優しく、大人の余裕と包容力にあふれていた。

「バスルームとか寝室とか。和志くんの部屋もあるよ」

「み、見たいです！」

薫はすかさず返事をしていた。この家の中が気になるのももちろんだが、今の状態が気恥ずかしくて堪らなかつたのだ。

「ん。じゃあ、行こうか」

崇弘は一度玄関まで戻って、そこから案内してくれた。

「ここがトイレね」

そう言つて、一つのドアを開ける。そのすぐ隣はウォークインクローゼット。ドアを開けると、壁は天井までボックス状の棚で埋まり、衣類以外にも季節家電や掃除道具が種類別に仕舞われていた。

クローゼットというよりは倉庫に近い印象だ。棚のボックスケースには一つずつラベルが貼られている。家電の取り扱い説明書や保証書もセットで入っていた。掃除用の洗剤や詰め替え用はひとまとめになっている。

（あ、結構わかりやすい配置）

スポンジの予備やぞうきん、バケツ、掃除機の場所を一つずつ点検しながら、薫はそんなことを思った。よく使う羽ぼうきや重曹スプレー、ぞうきんがまとめて入れられているプラスチック製のカゴもある。これはどこか、働いていたハウスキーピングの掃除道具入れを連想させた。

「ここね、薫がだいたい整理してたんだよ。俺は服や家電を適当に押し込んでただけど、今はわか

りやすくなってるだろ？ 全部薫がやつてくれたんだ」

なるほど。では今薫が見ているこの掃除道具が入ったカゴも、過去の自分がまとめたのか。どうりでわかりやすく感じるはずだ。重曹水が入っているスプレーボトルも詰まりが少ないと評判のもので、薫は個人的にも愛用していた。でもこれは新しいから、持ち込んだというより新調したのでろう。

「……なんとなく……どこに何があるかわかるような……」

ポツリと呟くと、サツと崇弘の目の色が変わった。

「思い出したのか!？」

崇弘の食いつきに若干驚きながらも、薫は苦笑いした。

「えっ、い、いえ……そうじゃないんです。私ならやりそうだなあ〜っていう配置になっているからなんとなくわかるってだけで、思い出したとはまた違うんです」

あくまで予想がしやすいだけであつて、記憶が戻ったわけではないのだと話すと、崇弘の顔から力が抜けた。

「ああ、そういうことか……ってつきり思い出したのかと……」

どこに何があるかわかるなんて言つたから、崇弘は薫の記憶が戻つたのだと思つたのだろう。

ぬか喜びさせてしまったことが本当に申し訳ない。

「ごめんなさい。紛らわしいことを言つて」

「あ！ そうじゃないんだ。俺のほうこそ悪かつた。焦りは禁物だと言つたのは俺なのに、結果的

に焦らせているね……。本当にごめん」

崇弘が静かに目を閉じる。落ち着こうとしているのだろう。呼吸をゆっくりにして目を開ける。薫と目が合うと、彼は静かに微笑んで「次、行こうか」と言い、ウォークインクローゼットを出た。その後ろ姿は少し肩が落ちているように見える。

妻として、夫を忘れることの罪深さを目の当たりにした薫の胸は痛んだ。

(どうして崇弘さんを忘れてしまったの？ わたしは崇弘さんにとっても酷いことをしてる……)

車に撥ねられて頭を打ったと言っても、まるで選んだかのようにピンポイントで、崇弘と出会ってから以降のことを忘れてしまっているなんてあんまりだ。せめて結婚生活のことを少しでも覚えていればよかったのに。そうすれば彼を愛する気持ちを持ち続けることができたはず――

「どうかした？」

「あ、ごめんなさい。今行きます」

急いで廊下に出て、次の部屋に案内してもらった。

次は個室だった。この家には五つも個室があるという。その中の一つのドアを崇弘が開けた。

「ここが和志くんの部屋だよ」

「わあ……」

六畳ほどの部屋は奥の窓側にベッドがあり、至る所に見覚えのある和志のものが置かれている。バスケットボールや、好んで集めていたコミックスに書籍。そして、オープンクローゼットには和志の服がかかっていた。

だが見たことのないものもある。その最たるものが、黒くてお洒落なデザインデスクだ。勉強机なのかもしれないが、まるで洗練されたオフィスにあるような机だった。

そしてその隣には、机と同系色のモダンな仏壇がある。並んでいるのは両親の位牌だった。

和志とふたりで住んでいたアパートが、賃貸ではあったが実家だ。当然のごとく、寮にすべての荷物を持っていけるわけではないので、実家を引き払ってしまったのなら荷物の置き場が必要だ。

崇弘は和志の荷物を置くために一部屋空けてくれたのか。

部屋はチリ一つない。ベッドも綺麗に整えてあり、こまめに掃除されているのは一目瞭然だ。

和志は薫と崇弘が結婚した年の冬休みと今年の春休み、そしてゴールデンウィークにここに来たらしい。

「弟のためにこんなに素敵な部屋を……両親の仏壇も新調してもらったんでしょうか？ ありがたいとうございます」

お礼を言うと、崇弘は当然のことだと笑った。本当は仏壇をリビングに置こうとしたところ、和志が自分の部屋に置いてほしいと強く主張したらしい。

「薫のご両親は俺の両親と同じだし、弟は俺の弟と同じだ。今は俺らふたりが和志くんの保護者なんだから。学費も何も心配いらぬよ。和志くんが大学に行くなら、俺が全部出すしね」

崇弘の優しい言葉に薫は胸を打たれた。だが同時に、甘えてはいけないという思いがよぎる。

「そんなのいけません。和志の学費はわたしがちゃんと用意しますから！」

「薫。俺は薫が外で働くのが嫌なんだ。俺の側にいて、俺のためだけにご飯を作ったり家事をして

ほしいんだよ。だからね、これは俺のわがままなんだ。言っただけだけど、この件に関してはもう話がついてる。結婚する時に話し合って、薫も納得してくれたしね」

過去の自分は崇弘の提案を呑んだのか。今の薫としては驚くべきことだ。

しかし、話がついていると言われては、その時のやり取り一つ覚えていない自分が出る幕ではないように思えてくる。

(いいのかな……それで……よくないような……でも……)

薫が思案顔で黙ると、崇弘が「次の部屋に行こう」と手を引いてきた。

「この三部屋は空き部屋なんだ。広さは和志くんの部屋と同じだよ」

和志の部屋の隣に一部屋、斜め向かいに二部屋。合計三部屋が空き部屋なのだそう。

「このマンションを買ったのは通勤に便利なのと寝室の間取りが気に入ったからなんだ。本当はこんなに部屋はいらなかったんだけど、思いがけず結婚して、『ああ、部屋があつてよかったな』ってしみじみ思ったものさ。空き部屋は将来子供部屋にするといいかなって話してたんだ」

「こつ、子供ッ!?」

反射的に叫んでしまい、その声の大きさに自分で驚く。目をまんまるに見開いた薫とは対照的に、崇弘は目を細めて笑うばかりだ。

「子供、欲しくないのかい? 部屋はこんなにあるのに」

聞かれて薫は焦ってしまった。子供は好きだし、できるなら欲しいと思っっている。でも男の人とこんな話をしたことはないの、どう答えたらいいかわからないのだ。

(そっか、結婚してるから……そーゆー話も出るのか。ひとり一部屋なんて贅沢な)

薫と和志にはひとり部屋なんてなかった。ふたり共、学習机と布団だけでいっぱいになってしまいう六畳一間を一緒に使っていたのだ。子供の頃、ひとり部屋を持っている友達が羨ましかったのを覚えている。崇弘の子供はきつと幸せだ。

(崇弘さん似の赤ちゃんとか、すっごい可愛いだろうなあ)

金髪碧眼の子供がぼわんと浮かんで、薫は慌てて首を横に振った。彼の子供を産むのは自分かと思つと、そんな妄想をしていること自体がなんだか恥ずかしくなってしまったのだ。

「ほ、欲しいとは……思ってるんですが……今は……その、具体的にイメージができないというか、なんとというか……えっと……」

照れもあり、困惑もありで、気の利いた言葉がでてこない。

しどろもどろで答えると、彼はうんうんと頷きながら空き部屋のドアを閉めた。

「まあ子供は授かりものだしね。薫はふたり姉弟だろ? 俺もそうなんだ。弟がいる。俺より先に結婚したからちよつと前に子供が生まれてね。俺の両親は今、初孫に夢中なんだ。だから俺達にせつついてくることはないだろうし。まあ、焦る必要はないよ」

彼の家族構成を聞いて、親戚付き合いのことをふと考えてしまった。なんとかして早く思い出さないと、色んな人に心配と迷惑をかけることになるだろう。

(崇弘さんのご両親……そっか、お舅さんとお姑さんってことになるんだね……)

「あ、あの、崇弘さんのご両親や弟さんはどんな人なんですか?」